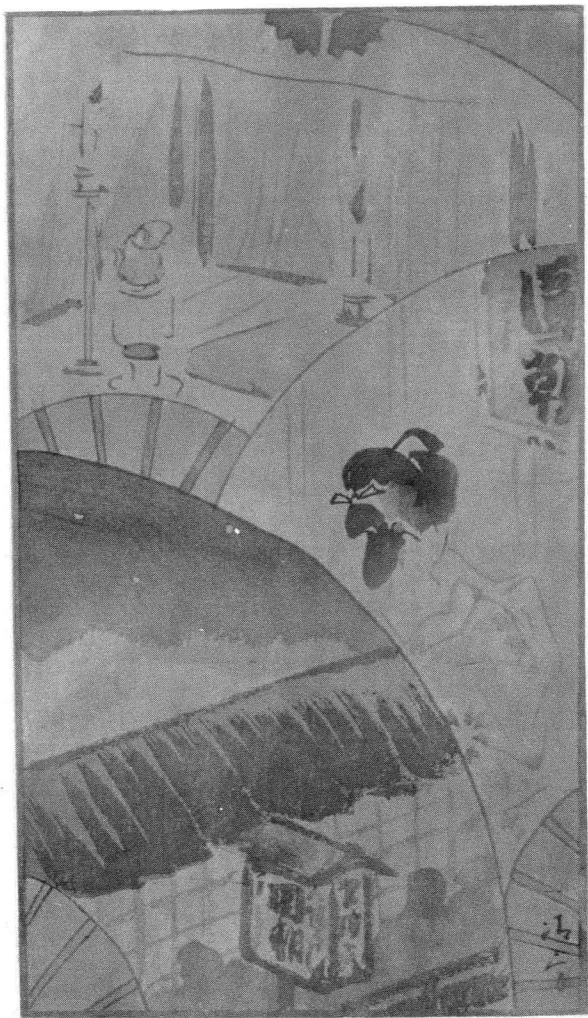






八の巻

近代文芸・資料複刻叢書第四集
昭和三十九年一月十日発行

全十四卷
定本 圓朝全集
〈巻の八〉

限定版 五五〇部 定価千弍百円 千二〇

校訂編纂者 圓朝會代表者 鈴木行三

発行者 松本富夫

	版	定	限	
第				

発行所

株式
会社

世界文庫

東京都目黒区原町一、三五五番地

電話 東京七二三局九二四四(代表)
振替 東京七八四九八番

金澤
敬
成



辭題公朋有縣山の頭巻りまな夷蝦説椿

圓朝全集 卷の八 目次

口 繪

内藤新宿時代の書翰
山縣含雪公題字
 樁說蝦夷なまり口繪（樁說蝦夷訛所載）
（水野年方）

怪談乳房榎……………（挿畫）落合芳幾……………一

蝦夷錦古郷之家土産……………（序）
（挿畫）
 條野採菊
 大蘇芳年……………二九

樁說蝦夷なまり……………（序）
 子爵末松青萍……………二九

怪談阿三の森……………五二

怪談乳房榎

一

偕、今回より引續きまして御機嫌を伺ひます怪談乳房榎と申します話、江戸名所圖會にも出てをります、高田砂利場村の、大鏡山南藏院といふ眞言宗のお寺の天井へ、雌龍雄龍を墨繪で書きました菱川重信といふ人のお話で、この重信は雄龍だけを彼の天井へ書きまして、非業な最期を遂げて遂に望を果しませんから、死にましてから幽霊が、書きかけました雌龍を又書いたと申す事で、末には赤塚村の乳房榎の前で、七才になりまします重信の遺子眞與太郎が、父の敵を討ちますといふ凄む話でございしますが、何家業でも、人に名人だ上手だと云はれます程な人はその致します事にも魂、精神が這入ると申す事で、取分けまして繪師などは、書いた物に魂が入つたといふ事は、まゝ聞きます所で、古法眼元信の描きました馬は、夜な／＼脱出しまして萩を喰べたの、誰が精神を籠めて書いた龍は、水を飲みに出かけたなどと、古來から云ひ傳へますが、其の内でも圓山派といふ一

派を廣めました圓山應舉などといふ人は、名人でございますが、この應舉先生が、不斷飲みにお出でなさる京都の或る所に料理屋がございましたが、此の家は老人夫婦に娘が一人あるといふ、極真面目に、うまい物ばかりを喰はせる、随分流行見世でござりましたが、物には盛衰があるもので、近頃はさつぱりと客がない。應舉先生は大人でございますから、流行り流行らないなどには頓着なさいませんで、應「今日は、何か旨い物があるかの、一杯つけてくれる。なんかとお出でになります。寂れましたもんですから、家の普請や繕ひも碌々に致しせんから、根太が腐つて、家へ總體曲りが出て、襖や障子の開閉が思ふ様でない。疊はといふと、一昨年の七月裏返したつ切で、眞黒になつて、所々へ未練に藥袋紙なんぞを、櫻の花の形に切つて張りつけて、破れを胡麻化してある。先生は娘に酌をさせて、御酒を召上つてお出で、下から上つて参りました主人は手をつきまして、亭「先生様、毎度御最前にお出で下さいまして有難うございます、斯様なむさい所へ。應「いよゝゝ誰かと思へば内の御亭主が、今の造り身はいつも手際ちや、一つ呑まんか。などゝものに頓着なさるゝ應舉先生、主人の老人は盃を受けまして、見世の寂れました事を話しまして、亭「どうか先生様、元の様に繁昌致しまする御工風はございませぬか。と水つ鼻と涙を

交ぜまして申しますと、應「それは氣の毒ぢや……が案じぬがよいぞ、己が今度来る時に、元の通り見世が繁昌する様に、何か認めて持つて来て遣はずぞ。亭「それはまア有難うございます。應「今度参る時に屹度持つて来るぞ。と其日はお歸りになつたが、四五日置さまして、先生は風呂敷へ包んだ物を御持参でお出でになつた。應「さア約束ぢやから認めて持つて来た、定めし表装いたすのも迷惑であらうと思つて、床へ懸けるばかりにして持つて来たぞよ。と直に其の掛物を床へ懸けさせまして、その日も相變らず御酒を飲んでお歸りになつた。後で主人夫婦は悦びまして、どんな物を書いて下すつたかと、件の軸の畫を見ますと、幅の廣い絹地へ、二十歳か十九ばかりな美人が病みあげくと見えまして、髪が亂れてかう……顔へ懸かつて立膝をして、右の手で脱けた髪の毛を掴みまして、左りの手でかう……その毛を思はず絞つてをりますと、其の手へ血が滴つてをりまして、傍にぼんやりした薄つ暗い角行燈があるといふ、此の傍に坐つてをるのが美しいから如何にも凄いとんと四谷怪談のお岩が髪梳場の形で、よくは出来てをりますが、潰れかかつて今日は見世を仕舞はうか、翌日は戸を締めやうかと思つてをります所へ、忌はしい晝でございますから、主人の爺さんは、まゝ縁起が悪い、こんな物を、と眼を剥き出して、いや怒るまいこ

とか大層怒りました。

二

主人夫婦は恐ろしく怒つて居ります所へ、應舉先生がいつもの通り遣つてお出でなさいました。應「どうだな、今日は珍らしい物があるかな、一杯飲ましてくりや。とトン／＼二階へお上りに成ると、昨日の軸が床に懸けてある。日頃最屑にして下さる大切な客だから、いつもは婆さんと娘が飛出して來て世辭をいふのだが、今日は如何したのか無愛想で附きが悪い。頓て主人の爺さんが二階へ遣つて参りまして、亭旦那さま、昨日は有難うございいます。と禮を云ひます。應「いや、是は御亭主、きのふの掛物を早速かけて呉れて悦ばしい、何んとう出來たらうな。と少し自慢氣で仰しやると、主人は變なあんばいで、亭へい、ですが先生様、昨日下さいましたお掛物の畫がどうもハヤ少し。と一旦腹は立ちました、流石に面と向つては云はれませんが、口籠つてをりますのを、早くも見て取つた先生。應「あゝ、さうか何か……凄い所を書いて遣はしたから畫柄が悪いと申すのぢやな。亭へい、何でございますから何で、實は、あの、御存じの通り商賣が閑暇で、こんなに

寂さびれましたもんだから晝ひるを願ねがひましたので、それにあんな女の病人びやうにんなんぞの縁起えんぎの悪い淋さびしい晝ひるでは、愈々いよいよお客きやくさまが来こなくなりますますから、あれはまづ眞平御免まづらごめんくた下さいまし。と額ひたひへ汗あせをたらして手拭てぬぐひで拭ふきながら申まうします。先生せんせいはお笑わらひなすつて、應おう「はゝゝゝ如何いかにも亭主ていしゆ、手前てまへが氣きに懸かけるのは尤もつともぢやよ、はア無理むりではない、己おれが今參いままゐつた時ときに、いつもと違ちがつて入いらつしやいとも何共申なんもまうさないから、如何致いかいたした儀ぎかと存ぞんじをつた所ところぢや、これ、拙者せつしやが申まうす事ことをよく承つけたまはるがよいぞ、酒さけを持もつて參まゐれ、これ、然さう眞面目まじめで居ゐてはいかんな、困こまるよ、あれは斯かういふ譯わけぢや、陰いんは陽やうに歸かへるといつての、何事なにことも極度きよくどまで參まゐれば又元またもとへ戻もどるのが物の道理だうりで、其方そちの家うちも左様さやうぢや、斯様かやうに寂さびれ果はてゝ今日こんにちにも廢やさう止やめやうとまで決心けっしんいたすのは、是即これすなはち陰いんの極度きよくどまで參まゐつたので、此上このへは元もとの陽やうに歸きするより道みちはない、己おれが昨日きのふ認のふしめて遣つかはした晝ひるも其通そのとほりぢや、女おんなが病やまひに苦くるしんで死しになん／＼と致いたしをる忌いまはしい圖づぢやが、これ陰いんの極度きよくどで、最もう爰こゝまで參まゐつては、是これから徐々そそく陽氣やうきに歸かへるより仕方かたがないもので、其方そちの商賣しょうばいとても斯かう寂さびれて陰氣いんきになつたから、是これからは昔むかしの陽氣やうきに赴おもむくのが順道じゆんたうぢや、陰氣いんきの晝ひるではあらうが、己おれも身不肖みふせうながら圓山應舉ゑんざんおうぎよぢや、意こころに思おもふ處ところがあつて認しためたあの軸ちく、外ほかさずに懸かけて置おけ、陰いんも陽やうにかへる時節じせつがあるぞ。といつもの通とお

り御酒を召上つて先生はお歸りになりました。後で爺さんや婆さんは、額を集めまして相談をいたしました。が、まア御最良の先生があれ程仰しやつた事、丁度掛物は皆賣つて仕舞つて無い所ですから、其のまゝ懸つ放しにいたして置きました。さう致しますと忽ち此の評判が京都中へ弘まりまして、「お前彼處の幽霊の畫を見なはれたか、應舉はえらい者ぢやな、あの女が斯う……遣つてゐる髪の毛から、血がたら／＼滴つてをる凄さ、私なんぞは夜さり寝たら夢に見て魘れました。」いや、私まだ見に行かん、二朱ばかり遣うて飲みにいつて其軸を見て來ませう。「ほんに見て來やしやれ、えらいもんぢやさかい。とわい／＼と市中で噂を致します。さア繁昌を致したのは此の料理屋で、一年ばかりの間に、此の市中で掛物の畫を見たいといつて來る客で、思ひ掛けなく商賣があつて、二年目の春には毀れかゝつてをりました普請までいたし、元の通り立派な見世になつたといふ。また應舉先生の腕前の勝れた所も諸人が知りまして、高名の上にまた高名な先生にお成り遊ばして、諸大名より幽霊の極凄い所を絹地へ書いてくれ、また此方からは「唐紙半切でいゝから一寸小粋な幽霊を、なんぞと山の様に御注文があつて、唯今もつて應舉の幽霊の畫と申しますと高價な物ださうにございます。此の應舉先生の幽霊の畫は、あながち魂が這入つて動き

出したといふ譯ではございませんが、名人上手と成りますと、随分不思議な事がありますもので、高田砂利場村の大鏡山南藏院の天井へ雌龍雄龍を墨繪で書かれました菱川重信といふ繪師の先生は、このお方は元秋元越中守様の御家中で、二百五十石お取んなすつた間與島伊惣次といふお人でございましたが、生得畫がお好きで、土佐狩野はいふに及ばず、應舉、光琳の風をよく吞込んで、ちよつと浮世繪の方では又平から師宣、宮川長春などといふ所を見破つて、其上へ一蝶の艶のある所をよく味はつて、いかにもお筆先が器用で、一寸書く畫が活きて居る様だといふ高名を慕ひまして、畫を書いて下さいと頼み人が大層あります。家中では頻に此事の噂が高くなりまして、間與島は畫をよく書くさうだ、畫の禮ばかりでも樂に暮される、羨やましいなどゝやつかむ輩が澤山あります。其頃は世が開けませんから、少し利口だとか學者だとかいひますと、直に公儀からお糺しがあり、唯今なら探偵がありますから、間與島は自然とお上のお首尾が悪く成りまして、何も是といふ落度はござりませんが、終に永のお暇に成りまして、柳島の或る大商人が居りました寮を求めまして、是へ引移りましたが、二百五十石も取つてあいでのお人だから、何不自由なく、お好きな畫を書いてお暮しなさいましたが、お年は三十七といふので、美しい男ではないが、

元がお武家だから何となく立派で、品のよいお人にて、このまた御家内のおきせ様といふのが頗美婦でいらつしやる、年は二十四でございですが、器量が好いせぬか廿歳位に見えませんで、役者の瀬川路考にどこやら俤が似てゐるからといふので、誰いふとなく柳島路考くんと申します。

三

間與島伊惣次様の御家内おきせ様は、前以て申し上げます通り、柳島路考といふ噂をされる程な頗な美婦でありますが、却つてこれが其身に災を及ぼす種と、後に思ひ當りますが、御夫婦中は至つて和睦ましいが、満つれば缺くるとやうで、お子さんがない。よく譬へに金のあるお方を祿人といひ、子のある人の事を福人とか申しますが、この重信先生にはお子がない故、どうか一人ほしいものと、神へ願込めなどを致して居りましたが、人の一心は貫くもので、おきせ様が懷妊におなりなすつて酸ばいものが喰べたいといふ。重信先生は大悦びで、何ともなさらないが、お醫者にかけて薬を飲ませる、高い所などへは必ず手を上げてはならんぞ、と大事になされます。十月満ちまして、寶曆二年の正月

元日に出産がござりました。然もお生れになつたのは男の子だといふので、重信先生はこ
ろ／＼悦ばれまして、名を眞與太郎を名付けまして、蝶よ花よと慈愛んで育てられ、成人
をするのを待兼ねておいでなさる。丁度其年の三月の事で、向島の櫻が眞盛りで、取わけ
今日は十五日故梅若でござりますから、花見がてら參詣しやうと、おさせ様は丸鬘に結ひ
まして、まだ半元服で、下女と五十一に成ります正介といふ親爺を供に連れて、重信先生
は細身の大小に黒の羽織、淺黄博多の帶、雪駄ばきで、眞與太郎を下女に脊負せまして、
ぞろ／＼雜沓の中を梅若へお参りなすつて、お歸りになりましたのは、小梅の茶
屋でござりましたが、此の茶店の婆さんは柳島近所のもので馴染でござりますから、重信
先生は門口から、重「どうした、婆さんいそがしいかの。」と聲を懸け、婆「おやまア、何方さ
まかと存じましたら、柳島の先生様、御新造様、おや坊ちやんをお連れなさいまして……
お花見でござりますか、それはまアよくお出で……おやは正介さん、お花どんもお供
で御苦勞様、今日は梅若様の涙雨つて、昔からいひまして、雨が降るもんでござりますが、
まア降りませんでよい御都合で、もうお子様方をお連れ遊ばして、道でお降られなすつて
御覽遊ばせ、それこそ大變でございます、おやまアまだお禮を申しませんで、先達は誠に

結構けつこうなお菓子くしを澤山たくさん下さいまして有難ありがたうござります、内のあなた爺ぢやいなんぞは生うまれてから、あんな結構けつこうなお菓子くしは見た事ことはないと申まうして悦よろこびましてさ、貴方あなた、有難ありがたうござりました、さアお茶ちやを一つ、もういけないい澁茶しぶちやでございます。と一人ひとりで喋しゃべつてをります。重信しげのぶ先生せんせいを初はじめ皆床みなしやう几こしへ腰かをお懸かけなさつて、眞與まよ太郎たらうに小便せうべんなどを遣やつてをられました、重信しげのぶ先生せんせいは、隅すみの方に腰こしを懸かけて、後向うしろむきに成なつて辨當べんたうを遣つかつてをります三十ばかりの色いろの黒くろい男おとこに聲こゑを懸かけまして、重おいゝ其處そこに居ゐるのは竹六たけろくぢやアないか。この竹六たけろくと申まうす人は淺草田原町あさくさたはらまちにをります地紙折ぢがみなりでござりますが、只今ただいまは其様そのようものはございせんが、此頃このころは、地紙折ぢがみなりと申まうして、扇あふぎの地紙ぢがみと骨ほねを箱はこへ入れて包つんで脊負しよふひましては、花見はなみなんぞの場ば所しよへ商あきなひに持もつて参まゐりますので、これはよく人ひとが即席そくせきに晝ひるや書しよ、詩歌しうかなどを扇あふぎへ書かきます事ことが流行はやりましたから、それを直すに其座そのざで折をりまして骨ほねをさして出すといふ、それは手際てぎなものでさうにござります。竹六たけは重信しげのぶでございますから、竹たけいよゝこれは、何方どなたかと存ぞんじましたら、柳島やなぎしまのお先生せんせい様さま、御新造ごしんぞう様さま、坊ぼくちゃんをお連つれ遊あそばしてお花見はなみ、どうも誠まことに綺麗きれいで、いゑ存外ぜんぐわい御無沙汰ごむさたをいたしました、いよこれは正介しやうすけさん、お花はなさんいつも美うつくしいね、今日は御新造ごしんぞう様さまのお供ともで、白粉おしろいをおつけなさると平常ふたふとは違ちがふよ、器量きりやうがずつと

上るからをかしい！エー御無沙汰を致しましたのは、此の三四月頃はあなた、書畫會が多
うございますので、何か席上へ參つて慾張筋で、傍から地紙が賣れますもんですから、終
つひ御無沙汰に相成りましてどうも恐れ入ります、正介どんあの節は何うも申し譯がない
大層酔ひましたもんだから、さつぱり道を忘れて、とう／＼お前さんに送り出されるなん
て、それを私はちつとも知らないんだから、酔ばらひ位暢氣な物はない。などと如才ない
から下女下男に迄世辭を振撒いてをります。重「イヤ其様な事はいいが、あれぎり來んから
何うしたかと思つてをつたよ、少々頼み度い事があるから一寸來てくれんか。竹「へい早速
上ります、え、明後日は屹度上ります。重「お前が來るといふのは當にならんが、また待ち
ぼうけはいかんよ。竹「いえ何う致して、今度は大文夫で、なに大丈夫でございます……え
ゝそれに先日願ひ置きました、あの絹地の細物は、まだえゝお認め下さいませんかな。
重「おゝあれか、あれはまだ認めんよ。竹「大方まだとは存じましたが、先方でも急には出
來んが、其の替り出來れば、先生様のだから大した事だと申してをりました、何うもいつ
も御新造様のお美しい事、この砂つぼこりの中をお歩きなすつても、ちつとも汚れないく
らゐなものはない、えゝ坊ちゃん、えゝ私でござります、竹六で、たけ六爺やアさ、え